

(課程博士・様式9)

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科

学位論文審査報告書

審査委員

審査委員長

古田 真司

委員

村山 功

委員

石川 恭

委員

野地 恒有

委員

柳葉 比呂

委員

委員

審査期間 平成 30年 11月 22日 から 平成 31年 1月 26日

審査論文

軽度知的障害生徒における自己理解の支援に関する実証的研究

専攻 共同教科開発学専攻

氏名 伊藤 佐奈美

生年月日 昭和 33年 4月 1日

提出日 平成 30年 11月 7日

この論文は、知的障害者の自己決定支援は必要とされながらも十分な実践がなされてこなかった現状を踏まえ、現在社会的ニーズの高い比較的軽度な知的障害者に注目し、自己決定、自己理解支援の在り方に関して、実践的手法を用いて研究を行ったものである。特に、特別支援学校高等部に在籍する軽度知的障害生徒における青年期教育の課題を提起し、「自己理解」の内容を扱った集団学習の指導実践を報告し、その効果を検討している。論文は、次の6つの章で構成されている。

序章では本研究に至った経緯及び研究の目的・方法について述べ、第1章では、知的障害者の自立と自己決定の考え方を歴史的背景から概括し、知的障害者の自己理解や自己決定支援の在り方を①支援者の関わり②知的障害者自身の学習の二つの視点から捉える重要性を提起し、現在課題となっている特別支援学校高等部の軽度知的障害生徒の在籍数の増加と、そこでの青年期教育の必要性を論じている。第2章では、知的障害児童生徒に対する教師の意識を取り上げ、知的障害生徒が育つ過程における環境や支援の状況を確認し、知的障害を理解する困難さについて論じている。第3章では、不登校など学校不適応を示す生徒の事例検討を行い、軽度知的障害生徒が「自己理解」に至る過程を考察している。第4章では、学校生活に関する質問紙調査の結果から、就学先決定時の意思決定や中学校の在籍学級の影響が学校生活の適応や満足度に及ぼす影響を分析し、結果から学年が上がるにつれて自己の目標がより自己の特性理解を反映したものに変化することを報告している。第5章では、教科「職業」における授業実践を行いその結果を考察している。教材開発の工夫や教師の評価のフィードバックを行った実践結果から、タイプの違う二つの生徒のグループ(自信がなく萎縮した自己像を示すグループ及び客観的な自己認識に欠け自己肥大を示すグループ)のいずれにおいても、自己理解が促進され自己評価に変化が見られたと結論づけている。終章では、研究成果をもとに軽度知的障害生徒の自己理解とその支援の在り方を考察し、研究を総括している。

この論文は、理論、実践、検証、考察等が精緻に記述され、データや資料も添付されており、反証可能なものであり、この分野の実証的研究としては先駆である。また、特別支援教育の今後の発展に多くの示唆を与える教科開発学の観点からの論考であり、本教科開発学専攻の学位論文に値するものである。

以上から、博士(教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると認める。